

評価項目	評価指標	具体的方策	評価基準				最終評価				
			4	3	2	1	評価	成果〇と課題▲	改善策		
確かな学力	気付く子 【メタ認知】 振り返りを活用して 価値ある物事に気付く 児童に	○各学期末テスト（知識・技能）の通過率80%未満を0に近付ける。（基礎問題）	○振り返りを活用した指導の充実（一人1授業以上の提案：示範授業含） ○条件に合わせて書く活動の充実（海小タイム、ドリルタイムの活用、作品応募） ○声に出す活動の充実（音読・歌唱：ドミソ発表会） ○80%未満児童への個別指導（給食前学習・放課後学習） ○読書活動の推進 ・教科等における読書活動、調べ学習（読書感想文・ポップづくり・ビブリオバトル等） ・読書の量と質の向上（30冊読書の取組・担任以外の読み聞かせ「ドキドキ読書」） ・図書委員会や子ども司書による多読の取組 ○一人1台端末・ICTの効果的活用 ○家庭学習の工夫（音読・計算・漢字・自主学習）	通過率 80%未満の割合	0～10% 未満	10～15% 未満	15～20% 未満	20% 以上	3	【各学期末テスト（知識・技能）の通過率80%未満の割合】 国語科11%（42/383人） 算数科16%（62/383人） 【標準学力調査の記述問題で平均正答率が目標値を上回った割合】 81% < 国語科100%（6/6学年） 算数科67%（4/6学年） 理科75%（3/4学年）> ○ドリルタイムや海小タイムのいずれも、各学年の課題に沿った計画を立てて実施することで、児童がねらいを持って意欲的に取り組むことができた。 ○振り返りの視点を与えて書く場面を意図的に設定することで、振り返る力が高まり、自分の成長を俯瞰して見ることのできる児童が増えた。 ○全学年でビブリオバトルに取り組んだり、図書委員会が企画したオンライン読み聞かせや図書室利用を推進する取り組みを行ったりしたことで、児童の読書活動が充実した。 ○校内研修で育成すべき資質・能力の共有を図ったり、実践したことを交流して次に活かしたりすることを通して、研修が充実し、児童の指導に活かすことができた。 ▲よりよい自主学習の仕方を、児童全体に広げていく必要がある。 ▲低学力の児童の学力の定着のために、定期的な給食前学習などの補習の機会を作る必要がある。	・放課後や給食準備中の機会に学力補充の時間を取り、学力定着に活かしていく。 ・自主学習の質の向上を目指して、どのようなところに力を入れるべきか職員間で取組を共有し、来年度に取り入れていく。
		○標準学力調査の記述問題で平均正答率が目標値を上回る。	○挨拶運動による全校への啓発 ・各学級・心の元気委員会による校門での挨拶運動 ・挨拶の意義の確認・挨拶標語等での啓発・振り返り ○挨拶名人の選出と活躍 ・学期ごとに学級で2名挨拶を頑張った児童を選出し表彰する。 ○実践力を育成する道徳の授業 ○登校班の育成 ・登校班長指導・ビックアップ指導 ○効果的な避難活動	児童の自己評価を踏まえた教師の見取り	80% 以上	75% 以上	70% 以上	70% 未満	4		
豊かな心	考える子 【コミュニケーション能力】 対話と協働を通して考え、自分や人を大切にすることができる児童に	○自分にはよいところがあると思う児童 70%以上	○自分のよいところを見つける活動 ○委員会活動やたてわり活動による互いのよさを認め合う活動	児童の評価を踏まえた教師の見取り	80% 以上	75% 以上	70% 未満	70% 未満	4	【アンケートで自分にはよいところがあると思うと回答した児童の割合】 全体：98% ○自尊感情を高める活動として、今年度取り組んだが、取り組み前の実態として、中間に調査した際に自分の良さを認めた児童が78%だったが、最終では、大きく割合を増やすことができた。 ○委員会活動と組み合わせ、クラス単位でのいい所見つけの活動ができた。そのため、クラスで取り組む活動として一体感が生まれた。 ○友達のいい所に注目してクラス全体を見通す力になった。 ▲いい所をたくさん見つけ、数を増やすような目標でも取り組む必要があると考えた。	・心の元気委員会の活動と「自分発見カード」を活用して、自分のよいところに気付くことができる活動の回数を増やしていく。 ・自分発見カードにもっと良い所を書き込めるスペースづくり、友達のいい所を多く探すことのできる環境を整える。
		○休憩時間に月20ポイント以上外遊びをする児童70%以上（休憩時間に外遊びをすると1ポイント）	○大休憩・学級タイム・ロング昼休憩における児童全員外遊び活動、 ○運動委員会による運動に親しむ環境づくり（外遊びポイントカード、遊びの紹介、道具の使い方・縄跳び講習会など） ○自己最高記録への挑戦（完走大会・長縄大会・縄跳び・体力アップ貯金カード）	休憩時間に月20ポイント以上外遊びをする児童の割合	80% 以上	70% 以上	60% 以上	60% 未満	4	【休憩時間に月20ポイント以上外遊びをする児童の割合】全校：86% ○大休憩・学級タイム・ロング昼休憩は、全員外遊びをする学校全体の取組を行い、年間を通して多くの児童が外遊びをする習慣が身に付いた。 ○運動委員会の児童が、大休憩に外遊びをする企画と運営を行い、2学期以降は、鬼ごっこやドッジボール以外にも、長縄跳びやPK戦を実施し、多くの児童が楽しみながら遊ぶことができた。 ○自己最高記録への挑戦として、冬休みに体力アップ貯金カードの取組を実施した。目標である3000Pを達成した児童は、全校で76%であった。 ▲猛暑日や寒い日といった季節によって、教室に留まる児童がいた。また、高学年は委員会活動があり、外遊びができない児童がいた。	・体育の授業では、児童の運動量を多くする指導や時間配分を考えた授業展開を行う。 ・運動会や陸上記録会などの学校行事において、児童に目標を持たせ、主体的に運動を行わせる。 ・休憩時間における運動会委員会の取組は効果的であった。来年度も引き続き取り組んでいく。
健やかな体	行動する子 【主体性】 体験活動を通して心と体が健康な児童に	○生活リズムカレンダーで自分が設定した就寝時刻の目標が達成できた割合 70%以上	○学級活動や保健の授業、生活リズムカレンダーや児童朝会での保健委員会による睡眠時間の啓発等。	生活リズムカレンダーの早寝の項目においてA評価の児童70%以上	80% 以上	70% 以上	60% 以上	60% 未満	3	【2学期の生活リズムカレンダーの早寝の項目における自分で決めた目標の達成率】77.1% ○健康委員会の児童が、早寝早起きの啓発動画を作成し、発表をすることで、楽しく規則正しい生活習慣づくりについて学ぶことができた。 ○学期末に、各学級・学年で生活リズムカレンダーの全体や個別の結果を確認し、全教職員で共有することができた。 ○第1回目よりも2回目の方が達成率が0.4%増した。 ▲就寝時刻の目標達成率は、起床時刻やメディアの使用時間の目標達成率と比べると10%以上低い。	・自分の就寝時刻と生活習慣を関連付けて考え、振り返り、改善していくことを来年度も続けていく。 ・全体指導と個別指導を組み合わせ、実態に合わせた指導を行う。
		○時間外勤務45時間以内の職員割合を70%以上	○企画運営委員会・分掌部会・学年主任会・学年会・SST・終会等による共有と行動目標の確認 ○終会時におけるミニ研修の実施 ○学期末評価事務作業日の設定 ○全教職員による環境整備 ○定時退校日の設定（原則水曜日）	入退校時刻記録を基にした時間外勤務45時間以内の職員の割合を70%以上	70% 以上	60% 以上	50% 以上	50% 未満	3	【4～12月末日までの8か月平均の時間外勤務45時間以内の教職員の割合】62.9% ○職員会議や各部会を計画的に実施するとともに、行事予定に分掌や成績等の作業時間を確保していくことや、各種会議と作業を並行して実施することがスムーズに行われるようになり、業務時間の短縮につながっている。 ▲昨年度同時期と比較すると全体的な時間外勤務の割合は減少したが、研究発表会や150周年記念式典など大きな行事が続いたため、準備期間中に勤務時間を越える職員が見られた。	・退勤時間の自己管理システム化や、週の中日における定時退校日を設ける等の取組を継続して行っていく。 ・スクールサポートスタッフや用務員の配置等学校体制の利点を生かし、行事や授業の準備等の効率化を図ってきたが、さらに計画的に運用していく。
信頼される	可能性を信じ、学び続ける教職員 タイムマネジメントと教師力の向上	○時間外勤務45時間以内の職員割合を70%以上	○企画運営委員会・分掌部会・学年主任会・学年会・SST・終会等による共有と行動目標の確認 ○終会時におけるミニ研修の実施 ○学期末評価事務作業日の設定 ○全教職員による環境整備 ○定時退校日の設定（原則水曜日）	入退校時刻記録を基にした時間外勤務45時間以内の職員の割合を70%以上	70% 以上	60% 以上	50% 以上	50% 未満	3	【4～12月末日までの8か月平均の時間外勤務45時間以内の教職員の割合】62.9% ○職員会議や各部会を計画的に実施するとともに、行事予定に分掌や成績等の作業時間を確保していくことや、各種会議と作業を並行して実施することがスムーズに行われるようになり、業務時間の短縮につながっている。 ▲昨年度同時期と比較すると全体的な時間外勤務の割合は減少したが、研究発表会や150周年記念式典など大きな行事が続いたため、準備期間中に勤務時間を越える職員が見られた。	・退勤時間の自己管理システム化や、週の中日における定時退校日を設ける等の取組を継続して行っていく。 ・スクールサポートスタッフや用務員の配置等学校体制の利点を生かし、行事や授業の準備等の効率化を図ってきたが、さらに計画的に運用していく。